

「大拙を知らぬ者は大拙を語れるか」

森本あんり

岩波の全集刊行も、これで三度目ということである。没後三十余年、前回の全集編纂からも約二〇年が経過しており、生前の大拙先生ご本人を知る方々も少なくなったことであろう。しかし、前回時と比べていまひとつ顕著な違いは、外国人による大拙研究の進展ではないかと思われる。以前にもないわけではなかったが、現在ではその層も厚く広くなっている。当然のことながら、彼らの視線は、大拙によって大拙とともに禅や日本仏教を学ぶというよりは、大拙その人の思想や歴史的背景を批判的に考察することに向けられている。今回刊行された全集も、そのための重要な基礎資料として活用されることであろう。

国外の文献で近年特に目立つ論題は、大拙のナショナルリズムとのかかわりである。彼らの目から見ると、大拙の禅理解や仏教理解は、文明開化と廃仏毀釈によって窮地に至った明治の仏教が、啓蒙的合理主義を掲げて僧侶や祭儀中心の既成宗門仏教から個人的な直接経験を重視する在俗知

識人の非制度的な新仏教運動へと変質していったものに他ならない。しかもそれは、公私を分かつたぬ「国体」のイデオロギーと重なり合い、周辺諸国へと広がる明治政府の侵略政策に相即するものとなる。当初国内で仏教排斥の要因となっていたその外来性も、アジア全域の精神的一体性という虚構の根拠として逆に積極利用されるようになり、かつ同時にダーウィンの進化論を援用して、そのアジアの中でも日本の仏教こそが最も進化した純粹で高度な仏教なのであるから、日本こそがアジアの盟主たるにふさわしい、という論理を導く。そしてこの思想は、日清日露戦争を経て高まりゆく日本の対外的軍事的な自信と相俟って、死をも恐れぬ規律と自己犠牲の武士道精神に連結されてゆくのである。こうなると、大拙やその思想も結局は歴史の子であり、欧米文化の「黒船」に直面して反動的に拵え上げた近代日本人の自我意識の一例、ということになってしまう。私はこうした理解がどれほど正しいのかを公平に判断できるほどの勉強をしていない。以前から『日本の靈性』や『禅と日本文化』などの名著に親しみ、敗戦による神道的な国家体制の清算を歓迎する大拙を読んできた私には、少し辛口にすぎると思える批判だが、かといってまるきり見当はずれとも言えなさそうである。それよりも気になるのは、こうした外からの批判的な歴史研究が、国内の研究者

にどのように受け止められているのか、という点である。外国人研究者の側からすると、このような見解を日本人研究者に表明するのは非常に神経を使うデリケートなことでも、しかも議論は最後までかみ合わない、という印象がある。

大拙先生が禪者としてまた人間として並外れた魅力をもったお人柄であったことは、先生に親しく接することのできた人すべてが証言するところである。日本人であろうと外国人であろうと、先生に魅了された人はいなかった。とすれば、生前のご本人を直接知る者がより早く少なくともった外国で批判的な研究が始まったのも、なかば当然のことなのかもしれない。今はその内外の落差が一番大きい時なのであろう。

あるいは、禪をこのように歴史的に捉えること自体がすでに禪の誤解である、と言われるかもしれない。歴史的世界に内在しつつ無限に超越してゆく精神の働きからすれば、戦争も国家も「それがどうした」の一言で片づけられてしまふだろう。さらに、禪は個人の靈性体験を通してのみ伝達されるとすれば、そもそも大拙を知らない者が大拙を論じること自体無理なのだ、ということにもなる。その場合は、大拙の思想は本人を知る者のみの大密となり、やがて日本からも歴史からも消えてゆくだろう。大拙先生ならそこでやはり「それがどうした」と涼しい顔で言われるに違

であろうに、それをみな「西洋人」と括るのは少々乱暴ではないか。米国に住み米国人と結婚することや英語で著述し講演することは、今となつてはさほど特別なことでもないが、それで「西洋」を論ずる資格が十分だとはもはや誰も思ふまい。

この「東洋的」という言葉の意味については、上田閑照先生が丁寧な解説を加えておられる。しかしそこでも、「東洋人」と「日本人」の溝は埋められないままだし、「日本人が忘れていてイギリス人には見られる東洋性」「歴史的には東洋に現象したが根本的には汎人間的に可能なもの」「地球規模のカウンター・カルチャー」などの説明では、結局「東洋的」という言葉を使うそもその理由が失せてしまう。それならなぜ、書かれている内容そのままに万人に可能な「日本」の「近代」の「禪」の見方と言わなのだろうか。

*

今日私たちが大拙から学ぶことの一つに、宗教間対話の可能性という問題がある。近年は多元主義の時代とやらで諸宗教の対話があるいろと企画されるようになったが、その実態を見ると、集まる顔ぶれも交わされる議論も似たり寄ったりで、お定まりのイベントのようになってしまっている。かつてのように互いが自己の優越性を主張して譲ら

ないが、はてそれでよいのかどうか。中世スコラ学の泰斗トマス・アクィナスは、死の直前になって筆舌に尽くしがたい靈的な幻を見、それまでに書いたもの的一切を破棄するよう筆記役の修道士に命じた、と言い伝えられている。しかし弟子はそれに従わなかった。その尊い服従のおかげで、われわれは今日トマスの著作に触れ、そこから学び、それを評価することができるのである。先人が達し得たところと、後人が学ぶところは、次元がまるで違うのかもしれない。けれども、われわれの学問はそれで進むしかない。

大拙を知らない無知無明の徒として正直に言うのと、私は『日本の靈性』はよくわかるが、『東洋的な見方』はわからない。前者はそのものずばりを語っているが、後者は「東洋的な見方の特徴をなすのが禪だ」という断定にはじまつて、もっぱら日本の禪思想を論じている。しかし、まさか東洋を日本で代表させることはできないし、たとえ「シナ」と「インド」への僅少な言及を数に入れるとしても、その三国だけで「東洋」を括るわけにもゆかない。禪がすべての見方の根柢だと言うが、前述の研究者たちに従えば、その「禪」も明治以降に特徴的な日本の知的な禪であつて、宗門のそれとも異なり、日本の歴史に通底する不変の禅理解でもない。他方、「西洋」も国や文化によって千差万別

ぬような議論がなくなつたのはよいとしても、内容的には彼我の究極的一致を賞揚して安易なエネルギー交換に終わるか、あるいは一般信者の実践から遊離した迂遠な学問的秘儀になつてしまふことが多いが、大拙の言説はそのどちらにも傾かない。

宗教間に限らず、異なる思想や世界観の対話には、代表性の問題が不可避である。「対話」というからには対話の席につく特定個人が必要だが、それが単なる個人同士の対話ではなく、「宗教」間対話となるためには、その個人があくまでも自己の代弁する宗教集団と精神的な一体性を維持していなければならぬ。長くヨーロッパで共産主義との緊迫した対話を経験してきた神学者のモルトマンによれば、対話に参加する者がその出自母体の伝統から乖離すると、思想的な信認を失つて、対話そのものが皮相的な個人的見解の表明に墮す。対話者は、自分の進歩開明を売り物にして背後にある人々の頑迷固陋を嘆いたり嗤ったりしてはならないのである。

とはいえ、宗教間の対話には限界がつきものである。そもそも個人がある宗教を「代表」して語るなどということ、よほど組織機構や信仰内容がしっかりと確立していない限り不可能なことで、あるのはただ個々の「宗教者」の対話だけだ、と言う人もあろう。「対話」という場の設定

自体にも、すでに相当の負荷がかけられていることを認識しなくてはならない。対話中の相手は、実は本当に対話すべき相手ではない。対話は、対話者を少なくとも即自モードから対自モードへと切り替えてしまうからである。悪くすれば、対話という行為そのものが、本来の宗教的生を逸脱しこれを裏切ることなしにはできないかもしれない。ことに、言語（ロゴス）への合理化を前提とする対話（ディアログス）には本来なじまない形の宗教的実存もあろう。この点では、ドイツの古い修道院に迎え入れられ、「対話以前」の生のキリスト教的な修道生活に触れた経験を振り返っておられる西村恵信先生の文章『鈴木大拙の原風景』所収）は、たいへん興味深かった。かつて神学者のバルトも、「職人の芸が真に評価されるのは、自分の仕事に没頭している時であって、手を休めてあれこれと人にそれを説明している時ではない」と語ったことがある。対話にはそれなりの代償もあり、不均衡もある。大拙は、みずから対話を切り拓きつつも、それで万事を解決できるとは見えていなかった。

*

大拙は、日本が世界に送り出した最初の禅仏教「宣教師」である。欧米の研究も実践も、大拙の功績なしには考えられない。現在の世界人口統計からすると、キリスト教

徒は三三％、イスラム教徒が二〇％であるのに対し、仏教徒は六％弱である。私は、健全な文化的多元性の発展のために、キリスト教文化圏の中にもっともっと仏教が浸透していった欲しいと願っている。それは仏教のみならずキリスト教の再活性化にも益となるはずである。同じ理由で私は、日本にはキリスト教やイスラム教がもう少し根を張って市民権と発言権を得て欲しいと願っている。仏教についても、日本仏教が遂げた独自の発展の深みを喜びつつも、大乘系でないアジアの国々の別の仏教が導入され、圧倒的な多数を占める現在の日本仏教のあり方に改革と相対化を迫って欲しいと思う。そうしてこそ、お互いの理解と向上がはかられるからである。今日の諸宗教は、「精神なき専門人・心情なき享楽人」と化した現代日本人に別の選択肢を提示するという共通の課題において、真に一致し協力することができるかと信じている。

（もりもとあんり・神学）

編集室より

▽第二十六回配本、第二十六巻をお届けいたします。

▽次回配本は、第二十七巻「講演 一」です。一九〇九年から一九四三年までの大拙の講演を収めております。十二月七日刊行です。